

『うつほ物語』「蔵開」巻における風俗歌「名取川」

— 仲忠と「これこそ」のやりとりをめぐる —

山崎 薫

Abstract

一、はじめに

『うつほ物語』「蔵開上」巻には、正頼邸の北の対に訪れた仲忠を見た童たちが、歌謡を歌うという場面がある。先行研究において、この歌謡は、風俗歌「名取川」に関連するものと指摘されてきた。風俗歌は、平安期の貴族たちに愛唱された宮廷歌謡の一種であり、『うつほ物語』には、ほかに、「大鳥」という風俗歌の引用もみられる。既に、拙稿^①で明らかにしたように、風俗歌「大鳥」は、「内侍のかみ」巻における和歌や、「蔵開上」巻における消息の表現に用いられており、その詞章の内容が恋の噂をめぐるやりとりで活かされている。

一方、風俗歌「名取川」の詞章については、「蔵開上」巻だけではなく、「蔵開中」巻、「蔵開下」巻における仲忠と「これこそ」という女童のやりとりにおいても踏まえられており、それぞれの場面のかかわりが注目される。しかしながら、従来の研究においては、これらの表現について、十分に解き明かされているとは言い難い。

そこで、本稿では、「蔵開」三巻における風俗歌「名取川」の用いられ方について論じる。風俗歌「名取川」の詞章の内容がどのように理解され、物語に活かされているのかを検討することで、「名取川」が踏まえられた一連の場面の解釈を試みたいと考える。

二、風俗歌「名取川」

まず、「名取川」と呼ばれる風俗歌^②について確認する。『承德本古謡集』には、「名取川」から始まる次のような詞章が収められている。

名取川 幾瀬か渡るや 七瀬^{なせ}とも 八瀬とも知らずや 夜^{よる}し来^こしかば
あの (風俗歌「名取川」)

この詞章は、『承德本古謡集』にのみ現存する。ただし、『承德本古謡集』注釈^③においても指摘されている通り、『古今和歌六帖』には、この詞章に類似したものが和歌形式で収められている。

名とりがはいくせかわたるななせともやせともしらずよるしわたれば

(『古今和歌六帖』第三 せ 一七四六)

さて、名取川は陸前国の歌枕であり、和歌表現においては、その名称から「名(恋の噂)を取る」の意が連想され、専ら恋の歌に用いられる。例えば、「名取川」の詞章と同じく、「名取川」を「渡る」ということが詠み込まれた平安中期の歌には、次のようなものがある。

よのうきにこりにしものをあさましくなきなとりがはわたるころかな
(『千穎集』 雜 一〇三)

さ夜中に憂き名取川わたるとて濡れにし袖に時雨さへ降る

(『平中物語』第二十段 四九〇頁)

なとりがはわたりてつくるをしまだをもるにつけつよがれのみする

(『重之集』下恋 三〇九)

既に指摘があるように、風俗歌「名取川」で歌われる内容は、こうした和歌表現から、色恋のイメージで捉えられていた可能性が高く、恋人のもとへ忍んで通う様子や、それが露見し、噂になってしまった様子を想起させる。なお、詞章の「幾瀬か渡るや」について、日本古典文学大系は、「恋人のところへ行くため、瀬を幾つとなく渡ることだ」と解しているが、「幾瀬か」の「か」は疑問の係助詞であろう。「承德本古謡集」注釈のように、「いたい幾つの瀬を渡ったのか」と訳し、問答体の歌謡として捉えるべきだと考える。次に試訳を掲げる。

〔試訳〕名取川の、いつたい幾つの瀬を渡ったのか。七瀬とも、八瀬とも、知らない。夜に行ったからね（暗くて見えなかったから）。ああ。

「いつたい幾つの瀬を渡ったのか」という問いに対する回答は、夜に渡っているためよく見えず、「知らずうや」としてはぐらかされているが、「七瀬とも 八瀬とも」という表現や「夜」ということばに、恋人のもとへ遙々と何度も通って、浮名を流している様子が匂わされていると言えよう。

三、「蔵開」三巻と風俗歌「名取川」

次に、風俗歌「名取川」が踏まえられているとみられる「蔵開上」巻、「蔵開中」巻、「蔵開下」巻の場面と、それに対する諸注釈の解釈について、順に整理していききたい。

次に掲げる本文①は、「蔵開上」巻において、右大将に昇進した仲忠が、涼の住む正頼邸の北の対に、挨拶に赴いた場面である。

①大将、立ちとどまりて、「君はおはすや」。童べ、「今朝、内裏へ参らせ給ぬ」。おとど、「御方に聞こえさせ給へ。よろこびになん、こたびは、かたきなき心地するを、かつは聞こえさす」とて、遣水のほどよりおはしすぐれば、うなぬども、扇を叩きて、「名取川に鮎つるおとどの」と歌ひ合へり。大将見やりて、「さのたまふとも、え知らずや」とておはしぬ。

（蔵開上 五七五頁）

涼は不在であり、仲忠は、童べを通じて涼の妻のさま宮に挨拶をする。帰りに、遣水の傍らを通り過ぎたところ、童たちが、扇を叩いて拍子を取り

ながら「名取川に鮎つるおとどの」と歌い合うので、仲忠は「さのたまふとも、え知らずや」と返す。

童たちの歌う「名取川に鮎つるおとどの」という詞章は、先に確認した『承德本古謡集』所収の風俗歌「名取川」の詞章とは異なる。そのため、『うつほ物語』の諸注釈において、「名取川」との関係はどうみるかという点については、やや見解が分かれている。日本古典文学大系（以下、大系）は、「名取川」の詞章を紹介しながらも、「これとは別の謡であろう」と注している。一方で、校注古典叢書（以下、叢書）、室城秀之校注『うつほ物語全』（以下、室城全）、新編日本古典文学全集（以下、新全集）は、「名取川」と「同類」、「同様」の歌謡と捉えている。また、角川文庫は、「即興に詞を変えたものか」と、「名取川」の詞章を歌い替えたという説を提唱し、仲忠の返した「知らずや」ということばが、「七瀬とも 八瀬とも知らずうや」の「知らずうや」という詞章と対応していることを指摘している。

続いて、本文②は、「蔵開中」巻において、さま宮が男子を出産した折に、仲忠が産養の品を贈り、涼からそれに対する消息が届く場面である。

②日暮れぬれば、かの源中納言殿に、家司の中に心あるをめしてたてまつれ給。御消息、「あれは、かの暮れにとの給ひし人にとて、など申せよ」とぞありける。大将かへり給ぬ。その夜は、梳櫛させ、湯殿などせさせ給ほどもに、中納言殿の御消息聞こゆ。「くるこそ設くといふなれ、かねてこそはとなむ。名取川とも聞こえさすめり」とあり、御使ひどもには、さまさまの禄あり。

（蔵開中 六一六頁）

この場面について、本文①の場面と風俗歌「名取川」の詞章との関連を指摘するのは、室城全である。室城全は、仲忠の消息の中の「かの暮れにとの給ひし人」が、本文①の場面で「名取川」を歌った女童である可能性を指摘し、涼の消息の「名取川とも聞こえさすめり」について、「この産養の品をいただいた者は、仲忠殿に、「名取川鮎釣るおとどの」と申し上げたようですの意か」と注している。また、新全集も、これらの室城全の説を紹介しているが、「かの暮れにとの給ひし人」を「年の暮れに出産した人」として、さま宮とする説や、「名取川とも聞こえさすめり」を「仲忠殿が贈ってくだ

さつた品々は、もう評判をとっているようですよ」と解する説を提唱している。

また、次に掲げる本文③は、「蔵開下」巻の冒頭において、さま宮の男子出産に対する産養の七日目の宴が行われる中、仲忠と涼が語り合う場面である。仲忠は、涼のもとに見覚えのある女童がいるのに気づき、涼に素性を尋ねる。

③「まことに、ここに見しやうなる童のありしは、誰ぞ」。中納言、「いさ、あまたあれば、知らず。いずれぞ。中に、承香殿の女御の御もとなりしこそあれ」。大将、「もし、この我らが中将なりし時、灌仏の童に出だされたりしかは」。いらへ、「それぞかし。これこそとぞいひし」。大将、「それらか、一日、これらまかりしかば、扇を叩きて、「夕さり来」とひしは。いと馴れたりしと見しは、さなりけり」。

（蔵開下 六三〇頁）

この場面について、本文①の場面との関連を読み取っているのは、室城全、新全集である。これらの注釈では、仲忠の言う、「それらか、一日、これらまかりしかば、……」について、本文①の出来事を指していると注しており、「これこそ」という女童は、本文①で「名取川」を歌った童たちの一人であると捉えている。さらに、「これこそ」が言った「夕さり来」ということは、本文①で歌われていた風俗歌「名取川」の詞章の一部ではないかと指摘している。

本文③で話題に上った「これこそ」は、同じく産養の七日目の宴における本文④の場面にも登場する。さま宮ら女君たちにいる母屋を訪れた仲忠は、「これこそ」を見つけ、歌を贈る。

④式部卿の宮の御方、世に名立たる琵琶、源中納言のもたまへるを、いささか掻き鳴らして、さし出たまふ。大将、ともかくも言はで、かき鳴らし給て、「これはこの、名立たるものなりけりな」とて、一日、うなゐども歌ひし歌を、いと面白き音にかい弾きて、「いづらや。この折にこそ、かの扇拍子は」とて、少しかい弾きて給へば、兵衛の君といふ人、道にふたがり居て、「かかる所に入りおはしましては、まさに帰らせ給なんや」とて引きとどむれば、「あなわづらはしや。群猿の心地すれ」。

『うつほ物語』「蔵開」巻における風俗歌「名取川」

「大将御舎人どもぞかし」。大将、「うたてある隨身にこそは」とのたまふほどに、内裏より、綾襖のいと黒らかなる一襲、薄色の織物の細長一襲、三重襲の袴ひとへ、もいはずきよらにてさし出で給へれば、中将の君といふ人、取りて、かづけたてまつりつ。大将、御達の歌書きつけつる硯のもとに立ち寄りて、筆を取りて、懐紙にかく書きて、腰に結ひ付く。高欄のもとに、これかれ押しかかりて居たるところに、「みになりける。一日は、知らぬ人はとほこそ。今よりだに、知る人にとを」□て、すべし取らせて、……

（蔵開下 六三五―六三六頁）

本文④において、仲忠は、琵琶で「一日、うなゐども歌ひし歌」を歌う。この歌についても、本文①との関連から、風俗歌「名取川」を指していると解釈するのは、室城全、新全集である。さらに、室城全は、仲忠が「これこそ」に言った「知らぬ人は」ということばも、「名取川」の詞章のことばである可能性を指摘しているが、新全集は、室城全の説を紹介しながらも、「知らぬ人になれなれしくしては、の意」と注している。

また、仲忠が「これこそ」に贈った歌の内容は、後の場面で次のように明かされる。

⑤これこそ、かづけ物を持ちて思ふやう、「こればかり給はむとにやあらむ」とて、ひくひく見る。腰の方に、文結ひつけられたり。見れば、

「人知れず渡り初めにし名取川なほ見まほしや告げよいつこと

内裏わたりこそ忘れがたけれ。これは、寒げなる居住まひなり」

（蔵開下 六三八―六三九頁）

この歌について、大系は「人に知られないようにそつとあなたを思いそめて浮名を流すかもしれない（名取川を渡りそめた）のですが、やはり会いたいと思いますよ。どこにいるか私にお教えなさい。」と訳しており、他の注釈においても、これとほぼ同様の解釈がなされている。なお、この歌には、名取川ということばがあらわれる。大系、叢書は「名とり河せぜのむもれ木あらはれば如何にせむとかあひ見そめけむ」（『古今和歌集』巻第十三 恋歌三 六五〇 読み人知らず）を参考に挙げ、室城全、新全集はこの歌に加えて「みちのくに有りといふなるなとり河なきなとりてはくるしかりけり」（『古今和歌

『集』巻第十三 恋歌三 六二八 壬生忠岑を挙げるが、風俗歌「名取川」の詞章とのかかわりを捉えている注釈書はない。

以上、『うつほ物語』「蔵開」三巻において、風俗歌「名取川」が踏まえられているとおぼしき場面と、諸注釈における解釈を確認した。「蔵開上」巻の本文①については、風俗歌「名取川」との関連がかねてより指摘されている。童たちが歌う「名取川に鮎つるおとどの」は、『承德本古謡集』所収の「名取川」の詞章とは異なっているものの、角川文庫が指摘するように、仲忠の「え知らずや」ということばが、「七瀬とも 八瀬とも知らずや」という詞章と対応していることは看過できない。近年の多くの注釈の解釈と同様、本文①の場面においては、風俗歌「名取川」のバリエーションが歌われていると想定すべきだと考える。また、「蔵開中」巻の本文②、「蔵開下」巻の本文③、本文④に関しては、近年になって室城全が、はじめ「名取川」の詞章の引用の可能性を捉えている。「うなぬども」「扇を叩きて」「名取川」などの本文①にみえることばが、本文②、本文③、本文④に共通してあらわれていることから、室城全の解釈通り、これらは、本文①の出来事と繋がりがあがる場面として読み解くべきであろう。

室城秀之¹¹⁾は、論考においても、これらの場面の関連性について詳細に検討している。室城は、本文②の「暮れに」ということばと、本文③の「夕さり来」ということばは、いずれも風俗歌「名取川」の「夜し来しかば」という詞章のバリエーションであり、さらに本文④の「知らぬ人は」という表現も、「知らずや」という詞章と対応していると論じる。重要な指摘であるが、これらの表現がどのような意味を持ち、「名取川」の詞章の内容とどのようなのかかわるのかという点については、十分に明らかにされているとは言い難い。また、本文②、本文③、本文④がいずれも本文①と関係するとすれば、本文④と繋がりのある本文⑤の歌も、本文①の場面や「名取川」の詞章との関連が捉えられるべきだと考えられるが、先にも触れたように、やはり『古今和歌集』歌の引用しか指摘されていない。

そこで、次節からは、本文①で演奏された歌が、『承德本古謡集』所収の風俗歌「名取川」と同種の詞章を持った歌謡であると仮定し、本文②、本文

③、本文④、本文⑤に、共通して、女童「これこそ」をめぐる「名取川」の詞章を踏まえた表現があると捉えた上で、検討を進めていきたい。

四、仲忠の「これこそ」の歌

本文①においては、仲忠を見た童たちが「名取川に鮎つるおとどの」と歌い合う。注目されるのは、「遣水のほどよりおはしすぐれば」とあり、仲忠が、遣水の傍らを通り過ぎたところで童たちの歌唱が始まっている点である。遣水は名取川に、仲忠は名取川を渡り、鮎を釣る人物に、それぞれ見立てられていると考えられるのではないか。また、ここで歌われているのが、『承德本古謡集』に収められている「名取川」のバリエーションだとすれば、童たちは、名取川を頻繁に渡る人物の様子を仲忠に重ねて歌い、貴公子仲忠の好色ぶりを囁し立てていると解釈される。これに対して、仲忠は、詞章の「七瀬とも 八瀬とも知らずや」という部分を用いて、「さのたまふとも、え知らずや」、すなわち、「私が名取川を頻繁に渡る好色な男だと」そうおっしゃつても、(名取川を幾瀬渡ったのか)知るはずがない」とはぐらかしたと解釈されるよう。

さて、現存の「名取川」においては、この「七瀬とも 八瀬とも知らずや」という詞章の後には、「夜し来しかば」という詞章が続き、なぜ「知らない」のか、その理由が明かされる。既に室城論で指摘されているように、本文②、本文③の描写から、本文①には、直接語られていないものの、女童の「これこそ」が、「暮れに」(本文②)、「夕さり来」(本文③)という、「夜し来しかば」にかかわる表現を用いて仲忠に應對する出来事があったことが読み取れる。「うなぬども」とあるところから、本文①で「名取川」を歌っていた童は複数いたはずであるが、本文②、本文③、本文④、本文⑤では、仲忠の目は、「これこそ」一人に向いている。本文②においては、仲忠は、「これこそ」の素性をまだ知らなかったのにもかかわらず、産養の品物を、「これこそ」を指名して取り次がせようとしており、「名取川」を歌唱した「うなぬども」の中でも、「暮れに」、あるいは、「夕さり来」と應對した「これこそ」が、とりわけ仲忠の印象に残ったことを示しているよう。それでは、な

ぜ、「これこそ」のことばは、それほどまでに仲忠の関心をひいたのであるうか。

本文②にみえる「暮れに」と、本文③にみえる「夕さり来」ということばについては、それぞれ「暮れに（いらっしやい）」、「夕方にいらっしやい」と訳せる。ここで留意されるのは、「暮れ」、「夕さり」という時間帯と、現存する風俗歌「名取川」の詞章にみえる「夜」という時間帯との間にずれがあることである。「夜」は、「瀬」が数えられないほどの真夜中であるが、「暮れ」、あるいは「夕さり」は、日が暮れかかった、薄闇の頃合いを表すことばである。すなわち、本文①において、仲忠が風俗歌「名取川」の「知らずうや」という詞章を用いて、「（私が名取川を頻繁に渡る好色な男だと）そうおっしやっても、（名取川を幾瀬渡ったのか）知るはずがない」とはぐらかしたのに対して、「これこそ」も、すかさず、「夜し来しかば」という詞章を踏まえて、「ならば、暮れ方にいらっしやい（暗闇の中では無理でも、薄闇の中なら、幾瀬渡ったのか、知ることができよう）」と切り返したと解釈できるのではないか。「これこそ」の応答は、仲忠のはぐらかしをやりこめる、機知に富んだものであり、暮れ方に自身のもとに忍んで来て欲しいという、仲忠への誘い掛けも含んでいる。それゆえ、仲忠に鮮烈な印象を与えたと考えられる。

そして、本文③においては、「これこそ」が、かつて承香殿の女御のもとにいた女童であり、仲忠と面識があったことが明かされ、仲忠の興味をより一層引くこととなる。後の場面の本文④において、仲忠は、再び本文①の出来事を想起している。そのきっかけとなっているのは、涼の所有する「世に名立たる琵琶」を演奏したことであろう。仲忠も「これはこの、名立たるものなりけりな」と発言しており、「名立つ」ということばから、「名取る」、「名取川」、すなわち、「一日、うなぬども歌ひし歌」が、ことば遊びのように連想されたことが読み取れる。

風俗歌「名取川」を琵琶で演奏し、童たちの中でも、特に印象的な応対をした「これこそ」のことを思い返した仲忠は、「これこそ」を探し出し、歌を贈る。本文④における、「一日は、知らぬ人はとはこそ。今よりだに、知る人にとを」という仲忠のことばも、室城が指摘するように、やはり「名取

川」の、「知らずうや」という詞章を踏まえているとみられる。ただし、本文①における「さのたまふとも、え知らずや」という仲忠のことばとのかかわりを考えあわせれば、「知らぬ人」とは、仲忠のことを指すと解釈すべきではないか。「一日は、知らぬ人はとはこそ」は、「先日は、（名取川を幾瀬渡ったのか）知らない人は、（暮れ方にいらっしやい）とは（あなたはおっしやいました）……」という意味で捉えるべきであろう。

さらに、続く、「今よりだに、知る人にとを」については、本文⑤の、仲忠が「これこそ」に贈った歌の内容が解釈の手掛かりとなると考える。歌には、「人知れず渡り初めにし名取川」とあり、仲忠が「名取川を渡り始めた」こと、すなわち、「これこそ」への忍ぶ恋が、まさに始まったことが詠まれている。これは、「え知らずや」とはぐらかした本文①とは異なり、仲忠が「名取川」を渡っていることを自覚した表現だと考えられる。よって、「今よりだに、知る人にとを」は、「今からでも、（名取川を幾瀬渡ったのか）知る人として（私のことを思ってください）」と、自身が忍ぶ恋を解する人間だということとを弁解した発言だと考えられよう。

また、その上で、仲忠が「これこそ」の素性を知るといふ本文③とのかかわりから、「知らぬ人」「知る人」ということばには、大系、全書、叢書、角川文庫、新全集が指摘するように、「面識がない人」「面識がある人」の意味も掛けられている可能性は高いと考える。ただし、その場合も、叢書や新全集のように「人」を「これこそ」と解するのではなく、角川文庫のように、仲忠自身のことを指すと捉えるべきであろう。「先日は、（あなたのことを）知らない人は、（暮れ方にいらっしやい）とは（あなたはおっしやいました）が、今からでも、（あなたのことを）知る人として（私のことを思ってください）」というように、やはり本文①において、仲忠が「え知らずや」という発言をした点を踏まえて解釈するべきだと考える。

以上、「蔵開」三巻にみられる、仲忠と「これこそ」のやりとりについて検討した。本文①において、仲忠は、風俗歌「名取川」の詞章における、名取川を渡る人物として重ねられ、その好色性が囁し立てられているとみられる。それに対し、仲忠は、「名取川」の詞章を用いて、「さのたまふとも、え

知らずや」とはぐらかしていると解せよう。

また、本文①には直接語られていないが、本文②及び本文③の描写から、本文①の場面では、「これこそ」が、仲忠に「暮れに」(あるいは、「夕さり来」と言い掛けたことが読み取れる。これも、「名取川」の詞章の「夜し来しかば」という詞章が踏まえられた発言であり、「名取川を幾瀬渡ったのか) 知るはずがない」と言った仲忠に対し、「ならば、暮れ方にいらつしやい(薄闇の中でなら、知ることができるとしよう)」と切り返したものと捉えられる。

さらに、本文④における「一日は、知らぬ人はとはこそ。今よりだに、知る人にとを」という仲忠のことばも、本文①において仲忠が「え知らずや」と言ったことや、仲忠が「これこそ」へ贈った和歌の表現と関連づけて解釈すべきだと考える。本文④、本文⑤において、仲忠は、本文①の「名取川」の歌唱に対して「知らない」とはぐらかして答えたことを弁明しながら、今は、「これこそ」への思慕ゆえに、忍ぶ恋を「知っている」のだ、と訴えていると解せるのではないか。

五、風俗歌「名取川」がほめかすもの

続いて、「蔵開」三巻を通してみられる、これらの風俗歌「名取川」を用いた場面が、物語においてどのような意味を持つのかということについて考察してみたい。室城は、仲忠と「これこそ」の一連の場面について、「物語の主題からはそれる話題」の一つと捉えており、「物語のあちらこちらに、さまざまな話題を提供して、物語の進行を助けている」と読み取っている。また、新全集は、本文⑤の場面の頭注において、「仲忠がこれこそに贈った歌は、艶めいた恋歌の趣である。しかし、仲忠の歌に対して、これこそは「いとうれし」と喜ぶが、返歌をしていない。仲忠の行為は、優美なふるまいとしてとどめられる。この挿話は、「まめ人」仲忠の好色性を印象づけながらも、これこそ少女らしい清純さが全体の色調となっている」と指摘している。

確かに、「これこそ」は本文⑤の場面以降は登場せず、仲忠との関係の深まりも描かれない。しかしながら、これらの仲忠と「これこそ」の場面にお

いて留意されるのは、「これこそ」が涼のもとに仕える女童であるため、涼や涼の妻さま宮とのかかわりが付近に描かれる点である。特に、本文④の直前の場面においては、次のように、仲忠がさま宮に、非常に接近していることが注目される。

⑥大将の君、にるかにさし出で給へり。人々驚けば、「我と君とは、いみじく契りたる仲ぞ。かたみに、うち許さむとぞいひたる」とて入り給へば、母屋のすみの前に、方々の御産養の物ども参り据えたり。大殿、左大臣、種松などたてまつりたる物ども也。中に、種松が二なし。母屋の御簾のうちにぞ、産屋装束したるしうととどもいと多く居たる。大将、「今は、かく、大人しくなり給て、子かき抱き給らむこそ、あな恥づかしや」……

(蔵開下 六三四頁)

この本文⑥の場面について、大系は、「兼雅の示唆に従って仲忠は今宮(※稿者注さま宮)に近づこうと試みたのであろうか。こういう振舞を仲忠は女一宮には決して許さないし涼を近づけないに違いない」と、密通に繋がりがかねない場面であることを、頭注において示唆している。なお、「兼雅の示唆」とは、次に掲げる「蔵開中」巻の場面の兼雅のことばを指していると考えられる。

⑦「……今様の人は、あやしうよめるこそあれ。まづは、かしこき天下の帝の御娘を持たりとも、その妹みこたち、そのあたりの人の妻は、女御まで残してまじや。罪の浅きにやあらむ」とのたまへば、大将、「いとうたであること。一人侍りし時、いかでと思ひ給へし人をだに、よき折侍りしかど、さもあらずなりにしものを」。おとど、「それこそ、いと我ごとくなけれ。今も、などか、させざらむ。まかでものせられむ時、空酔ひをして、ただ入りに入るべきぞかし。人も騒がば、いたく酔ひにけりや。ここに、いづくぞ。中のおとどにはあらずや、と、ただ酔ひに酔ふばかりぞかし」。北の方、「いとあとしきこと多くし給けるかな。若き人は、親、かくのたまふとも、こそは、早う立ち給ね。な聞き給そ」。おとど、「男は身をかへり見、人の思はむことを知りなば、よき妻は得てむや。文通はして許されむ時、と言はむには、何わざをかせむ。隙を

みて、ふと入りぬればこそ。まして、あしこの乱れて歩かむは、追ふ女
しあらしかし。この宮と、源中納言の妻とは、早うこそ。などのたまふ。

…… (蔵開中 六二三―六二四頁)

本文⑦において、兼雅は仲忠に、さま宮らとの密通を唆している。ここでは、仲忠はそれに感じないで話題を変えるが、大系が指摘するように、本文⑥の場面では、あたかもこの兼雅の唆を意識したような行動を取っていると言える。

さらに、二節で触れたように、風俗歌「名取川」の詞章は、忍び通いが露見し、噂になってしまった様子を想起させるものである。このことを考え併せれば、童たちが仲忠に「名取川」を歌い掛ける「蔵開上」巻の本文①もまた、仲忠とさま宮の道ならぬ恋をほめかす場面となっていると捉えられるのではない。本文①では、涼の住む北の対に訪れた仲忠が、さま宮に挨拶を伝えた後、遣水の傍らを通り過ぎた時に歌唱が始まる。四節で論じたように、この場面では、遣水が名取川に、仲忠が名取川を頻繁に渡る人物に、それぞれ見立てられていると考えられる。すなわち、童たちの「名取川」の歌唱は、その場の状況から、「涼不在の西の対に、たびたび仲忠が忍んで渡つて来ているよ」とからかったものと解せ、仲忠の忍び通いの相手として、さま宮が匂わされている可能性が考えられるのである。

無論、物語において、仲忠とさま宮の密通が描かれることはない。本文①における風俗歌「名取川」の歌唱も、本文②、本文③を経て、さま宮ではなく、「これこそ」という女童と仲忠の色恋にかかわるものとして、ずらされて語られていくとみられる。その「これこそ」との関係についても、仲忠は涼にすべて明かしており、先述のように、仲忠と「これこそ」の関係が深まることもない。

既に指摘もあるが、仲忠は、兼雅のような「色好み」とは対照的に理想化されている人物であると捉えられる。「蔵開中」巻、「蔵開下」巻においては、仲忠が、兼雅の好色性の犠牲となっていた妻妾たちを三条邸に迎えることを企図し、実行する様子が語られる。先行研究において論じられるように、確かに、仲忠と「これこそ」の一連の場面は、そのような物語の主題には影響

を与えることのない挿話である。しかしながら、これらの場面においては、仲忠の好色性が取り沙汰され、仲忠とさま宮の道ならぬ恋がほめかされる点は注目される。仲忠と「これこそ」の挿話は、本筋の描写とは矛盾しないように整合性を持たせられながらも、「物語の進行を助けている」というだけではなく、本筋にはみえない人物の隠された一面や、起こりうる展開の可能性を描き出そうとしていると捉えられるのではないか。

六、結び

本稿では、「蔵開」三巻における風俗歌「名取川」の用いられ方について論じた。「蔵開上」巻の本文①においては、現存する詞章とは完全には一致しないものの、童たちによって「名取川」に類する歌謡が歌われていると考えられる。ここでは、名取川を頻繁に渡る人物として、仲忠が重ねられているとみられ、その好色性が囁し立てられている。それに対して、仲忠は、「名取川」の詞章を用い、はぐらかすように応答するのである。

さらに、従来の注釈においては解釈が分かれているが、「蔵開中」巻、「蔵開下」巻にみられる仲忠と「これこそ」の一連の場面は、本文①との繋がりが指摘でき、そのやりとりには、風俗歌「名取川」の詞章が踏まえられているとみるべきだと考える。「蔵開中」巻の本文②、「蔵開下」巻の本文③、本文④、本文⑤においては、本文①の仲忠の応答に対し、「これこそ」という女童が、「名取川」の詞章を踏まえた機知に富む切り返しを行い、仲忠の心をひいたことに関する話題が語られていると解釈できる。

仲忠と「これこそ」の関係の深まりが語られることはなく、この挿話は、直接物語の主題にかかわるものではない。しかしながら、これらの一連の場面の中で、たびたび仲忠の好色性や、仲忠とさま宮のかわりが描かれることは注目される。本文①の風俗歌「名取川」は、仲忠が涼不在の西の対に渡っている時に歌われたものであり、「名取川」が、忍び通いの噂が立つことを想起させる詞章を持つことを考え併せれば、この歌唱は、仲忠とさま宮の道ならぬ恋をほめかすものとして捉えられる。このような描写は、本筋においては語られることのない人物の一面や、物語の展開の可能性を示唆してい

ると考えられる。

看過できないのは、風俗歌「名取川」が、「内侍のかみ」巻で用いられている風俗歌「大鳥」と同様、恋の噂について問答する詞章を持ち、その要素が物語に活かされているという点である。「大鳥」は、現存する詞章によって問答の結末が異なっており、噂というものの不確定性を想起させる。拙稿⁽²⁰⁾で論じたように、「内侍のかみ」巻における唱和においては、「大鳥」の詞章を踏まえた表現によって、兵部卿の宮と承香殿の女御の関係をめぐめる噂があれこれ取り沙汰され、話題が兼雅と仁寿殿の女御の噂にまで及び、しかし、結局のところ、うやむやになつていく様子が描き出されていく。

対して、「名取川」の詞章は、『承德本古謡集』に収められたものしか現存しないが、問い掛けの詞章に対する答えが「知らずうや」となっており、やはり明確な回答が示されない歌謡であると言える。「葦開」三巻における風俗歌「名取川」は、仲忠の好色性や、仲忠とさま宮の密通の可能性といった事柄を、あくまで「そのような噂が立っている」という形で矚化しながら、物語に表面化させていく機能を果たしていると考ええる。

※「うつほ物語」の本文は、尊経閣文庫蔵前田家本の影印（早稲田大学中央図書館蔵紙焼き写真本を参照）に拠り、適宜漢字を宛て、濁点、句読点を付し、歴史的仮名遣いに改めた。また明らかに誤脱があると思われる箇所については、想定される本文を（）内に傍記した。参考として、『うつほ物語の総合研究1 本文編 上・下』（室城秀之ほか 共編 勉誠出版 一九九九）の頁数を記した。

※風俗歌の詞章は、『承德本古謡集』注釈（前編）（『歌謡 研究と資料』六一九三・一〇）に拠った。

※和歌については、『日本文学 WEB 図書館』（http://www.kotenlibrary.com/）「和歌&俳諧ライブラリー」内の『新編国歌大観』に拠り、適宜、表記を改めた。ただし、私家集歌については、同ライブラリー内の『私家集大成』に拠り、適宜、表記を改めた。なお、引用元の底本は以下の通りである（『千類集』「穂久邇文庫蔵『千類集』」、『重之集』「西本願寺蔵三十六人集『しげゆき』」）。また、『平中物語』の和歌は、新編日本古典文学全集12『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（清水好子 ほか校注・訳 小学館 一九九四）に拠った。

注

- (1) 拙稿「平安中期における風俗歌「大鳥」の受容―「うつほ物語」「内侍のかみ」巻の唱和歌の解釈をめぐって―」（『国文学研究』一七七 二〇一五・一〇）。
- (2) 『承德本古謡集』所収の当該の風俗歌に、曲名は示されていないが、日本古典文学大系11『宇津保物語 二』（河野多麻 校注 岩波書店 一九六二）以降、『うつほ物語』の注釈では当該歌謡に「名取川」の呼称が用いられてきた。便宜上、本稿においても、この呼称を用いる。
- (3) 歌謡研究会編『承德本古謡集』注釈（前編）（『歌謡 研究と資料』六一九三・二）、小野恭靖による「名取川」の項。
- (4) 注(3)の前掲注釈。
- (5) 日本古典文学大系3『古代歌謡集』（土橋寛・小西甚一 校注 岩波書店 一九五七）。
- (6) 日本古典文学大系11『宇津保物語 二』（河野多麻 校注 岩波書店 一九六二）。
- (7) 校注古典叢書『うつほ物語 ①』（野口元大 校注 明治書院 一九八六）。
- (8) 『うつほ物語 全改訂版』（室城秀之 校注 おうふう 二〇〇二）。
- (9) 新編日本古典文学全集15『うつほ物語 ②』（中野幸一 校注・訳 小学館 二〇〇一）。
- (10) 角川文庫『宇津保物語 中巻』（原田芳起 校注 角川書店 一九六九）。
- (11) 室城秀之「うつほ物語の後半の会話文」（『うつほ物語の表現と論理』若草書房 一九九六）。
- (12) 『万葉集』において、「鮎つる」ということは、巻五の伴家持の「遊松浦河」で、松浦河で若鮎を釣る乙女とのやりとりにかかわって用いられている。注目されるのは、「娘等更報歌三首」の八六〇番歌において、鮎が男性の訪れを待つ、澁瀬とした若い女性の姿に重ねられていることである。

蓬客等更報歌三首

まつらがは	かはのせひかり	あゆつると	たたせるいもが	ものすそぬれぬ
まつらなる	たましまがはに	あゆつると	たたせるこらが	いへぢしらずも
とほつひと	まつらのかはに	わかゆつる	いもがたもとを	われこそまかめ

（『万葉集』巻第五 雑 八五六〜八五八）

娘等更報歌三首

わかゆつる	まつらのかはの	かはなみの	なみにしもはば	われこひめやも
はるされば	わぎへのさとの	かはとには	あゆこさばしる	きみまちがてに
まつらがは	ななせのよどは	よどむとも	われはよどまず	きみをしまたむ

（『万葉集』巻第五 雑 八五九〜八六一）

後人追和之歌三首 帥老

まつらがは	かはのせはやみ	くれなるの	ものすそぬれて	あゆかつるらむ
ひとみなの	みらむまつらの	たましまを	みずてやわれは	こひつつをらむ

まつらがは たましまのうらに わかゆつる いもらをみらむ ひとのともしき

〔万葉集〕卷第五 雑 八六二～八六四

このような鮎の比喩が、本文①の「名取川に鮎つるおとどの」という童たちの歌唱にも踏まえられているとすれば、「名取川で、おとど（仲忠）が鮎（女性）を手に入れようとしている」という、やはり仲忠の好色性を囁し立てる内容として捉えうるが、なお検討を要する。

(13) 注(11)前掲論文においても、同様の訳が付されている。

(14) 『日本国語大辞典』（小学館）「ジャパンナレッジLib」<http://japanknowledge.com/>の「暮れ」、「夕さり」の項。また、『歌ことば歌枕大辞典』（日本文学WEB図書館）<http://www.kotenlibary.com/>「辞典ライブラリー」内の「佐々木孝浩による「暮れ」の項、檜垣孝による「夕されば」の項。

(15) 校注古典叢書『うつほ物語 四』（野口元大 校注 明治書院 一九九五）。

(16) 注(11)前掲論文。

(17) 日本古典文学大系は、延宝五年版本を底本としており、「内侍のかみ」巻や「沖つ白波」巻（延宝五年版本では、それぞれ「初秋」巻、「田鶴の群鳥」巻）にみえる涼の妻の呼称を、「今こそ」「今こそ君」「今宮」と校訂して、頭注でも「今宮」と呼んでいる。本稿では、最善本とされる尊経閣文庫蔵前田家本の表記（「さまこそ」「さまこそ君」「さま宮」）に従い、涼の妻を「さま宮」と称する。

(18) たとえば、新全集は、本文⑥の場面について、頭注で「兼雅の色好み論は、酒に酔った戯れ言として処理される。まめ人仲忠を主人公としたため、色好みの要素は、笑いによって排除され、矮小化される」と読み取り、「仲忠を理想化するためには、兼雅の過去の色好みは、徹底的に批判され、無力化されなければならない」と述べている。

(19) 注(11)前掲論文。

(20) 注(1)前掲論文。

・本稿は、二〇一八年二月二十五日に早稲田大学により学位を授与された博士論文の第一節第四章を改稿したものである。

The Fuzoku Song *Natorigawa* in the Three “Kurabiraki” Chapters of *Utsuho Monogatari*: On the Scenes between Nakatada and Korekoso

Kaoru YAMASAKI

In the three “Kurabiraki” chapters of *Utsuho Monogatari*, there is several scenes from which the lyrics of the fuzoku song (a kind of ancient court songs which was popular in Heian period) *Natorigawa* are quoted. The purpose of this paper is to interpret those as a series of story and clarify the relation between those and the meaning of the lyrics of the fuzoku song *Natorigawa*. The lyrics are dialogic, consist of the question (“How many shallows of the Natori River did you ford?”) and the answer (“I forded 7 or 8 shallows, but it’s very uncertain because I did at dark midnight”).

In the first volume of the “Kurabiraki” chapters, children serving Suzushi sing the fuzoku song *Natorigawa* when Nakatada visits him. In this scene, they compare Nakatada to the person who forded the Natori River in the lyrics. It can be interpreted that they banter him about his lechery, because fording it implies getting a reputation as a philanderer. Nakatada is embarrassed, quotes the lyrics and says to children “E shira zu ya” (“I don’t know how many shallows of the Natori River I forded”). Then, in both the middle and last volume of the “Kurabiraki” chapters, it is told that Korekoso (a girl in those children who sing *Natorigawa* in the first volume of the “Kurabiraki” chapter) also quotes the lyrics and says to Nakatada “Kure ni”, “Yūsari ko” (“Come on before it gets dark, and you will know how many shallows you would ford”). It’s a witty riposte to Nakatada’s word “E shira zu ya”. Therefore, he is attracted by her, and sends her his waka poem from which the lyrics are quoted.

On the scenes between Nakatada and Korekoso from which the lyrics of the fuzoku song *Natorigawa* are quoted, his lechery which isn’t told clearly in main stories is revealed.